□3月3日説教（隅野徹牧師）短縮版
「わたしたちの罪、隠れた罪」（詩編90:1～17）

今日の詩編90編の前半では、神を知れば知るほど、神が罪や悪をお嫌いになるお方だと分かってくると語られています。そして私たちが犯しつつたいして気にもしていないような罪や、気づかずに犯している罪、つまり隠された罪をもすべて見のがされないお方なのだということも、詩人の心に迫ってくるのです。しかしこの詩編は、ただその罪に気づかされて落ち込むところで終わっていないところが大切です。神はこの罪深い私たち一人ひとりと向き合って下さるお方なのだと、この詩人ははっきりと告白しています。

神を近くに感じた時、その聖なるまなざしが罪深い私たちとあまりにも違うことで畏れを感じてしまうのは当然です。しかし罪深い自分をさらけ出して神と語り合うことが許されていることが、13節から17節に記されています。

この箇所は12節までの祈りの言葉とは、全くトーンが変わっているかのように感じます。自らの罪深さには十分気づいているが、だからといって自分の人生が労苦と災いでおわってしまわないように、あきらめずに祈っているのです。この祈りの姿勢を見ならえたらと思います。

最後の16節と17節では、神に正直な思いをぶつける厚かましいような祈りをしたあと、この詩人が心に平安を得、確信を得て祈った言葉が記されていると受け取ります。罪深い人間一人ひとりが神の威光をあおぎ、自分の人生での労苦の意味を確かに見出す。そのことが祈られているのですが、これは神が私たちのために送って下さった、救い主イエス・キリストを通して成し遂げられることなのです。

人生のはかなさと空しさを感じることは、私たちの人生に必ずあります。罪深さも当然感じることでしょう。そんな時、この詩編90編の詩人の祈りを思い出しましょう。「自分は小さく罪深い者、神の前に赦しを乞うなど本当はできない者である。けれどもキリストはこんな者のために十字架にかかって死に、そして復活してくださった。だから希望があるのだ」と。（終）